第 3 回 ジオ・コスモス コンテンツ コンテスト ファイナリスト 16 組が決定！

本審査に向けて作品制作がスタート！6/3 に授賞式と発表イベントを開催！

日本科学未来館が主催する「ジオ・コスモスコンテンツコンテスト」の一次審査が終わり、本審査に進むファイナリスト 16 組が決定しました。

本コンテストは、世界初の地球ディスプレイ「ジオ・コスモス」の可能性と新たな映像表現を切り拓くことを目的として 2014 年から開催され、3 回目の開催となります。今回は、「目に見えないもの」を共通テーマとして、「映像」「ライブコンテンツ」「アイディア」の 3 部門で作品を募集し、国内外から 66 作品の応募がありました。

一次審査は企画書等の書類審査で行われ、第一線で活躍する研究者やクリエイター、館長の毛利衛による厳正な審査によってファイナリストが選出されました。

手前から審査員の毛利衛、明和電機 土佐信道氏、上田壮一氏

ファイナリストたちは、5 月に行われる本審査に向けて作品制作やプレゼンテーションの準備を、まさに今に進めています。企画書で提案されたアイディアがどのように実現されるのか。本審査は 5 月に行われ、大賞作品を決定、6 月 3 日に授賞式と発表イベントを行う予定です。どうぞご期待ください。

第 3 回ジオ・コスモスコンテンツコンテスト　ファイナリスト一覧

■映像部門　入選(5 作品)　ジオ・コスモスで上映する約 1 分間の映像

「プレイボール」	井上裕治 / 鈴木有吾 / 藤田裕介
「The Surface. -Appear and disappear-」	Daihei Shibata / Boxx Inc. / Futurek Inc.
「ウォッシング」	岡村浩志
「if you only knew」	中津川敦
「分裂し集結する世界」	笠原裕美子

■ライブコンテンツ部門　入選(5 作品)　ジオ・コスモスでリアルタイムの映像生成と上映が可能なプログラム作品

「エモーションズ」	相馬一夫 / 林洋介
「ひとけい」	アラカワケンスケ
「inside」	三上英樹 / 河上裕紀
「くっつく」	三上英樹 / 河上裕紀
「HBD / RIP」	西村 保彦 / 瀬長 孝久 / 曽根良介

■アイディア部門　入選(6 作品)　ジオ・コスモスとシンボルゾーンの展示空間を使ったアクティビティやイベントのアイディア

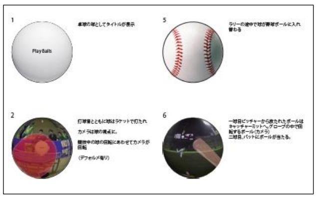
「Geo-Window　～漆黒の闇に輝く地球～」	久田 旭彦
「あなたの由来、何ですか？」	仲村 怜夏
「歌われる気象」	山崎阿弥
「写真は人を幸せにする」	矢嶋博士
「テクノロジー演劇公演　The power of imagination」	上嶋 萌
「地球おじさん」	降旗 俊介

■映像部門　ファイナリスト（入選）（5 作品、順不同）

ファイナリスト 5 組は、これから約 2 ヶ月をかけてジオ・コスモスに映しだす映像を制作します。本コンテストの開催当初からある映像部門は、年々、作品のクオリティがあがってきており、ハイレベルな本審査になることが期待されます。

【審査員】小久保　英一郎（天文学者）、辻川　幸一郎（映像作家）、長谷川　踏太（Wieden+Kennedy Tokyo　エグゼクティブ・クリエイティブ・ディレクター）、脇田　玲（アーティスト/慶應義塾大学 SFC 教授）　※敬称略、順不同

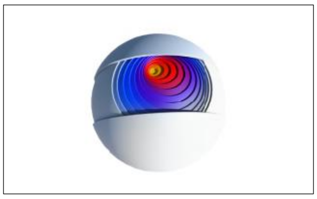
「プレイボール」　井上裕治　/　鈴木有吾　/　藤田裕介



ボール自体の表現と、ボールを取り巻く環境、人の対峙、攻防を表現することで、人と人の間を行きかう「ボールが見てきた」つながりや関係性、想いを表現する作品。

【審査員コメント】球体からみたまわりの世界がはたしてジオ・コスモス上でどのように表現されるのかがたのしみです（長谷川踏太）

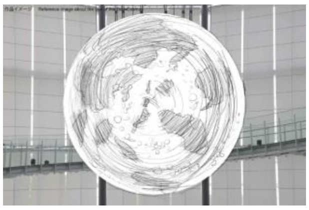
「The Surface. -Appear and　disappear-」　Daihei Shibata / Boxx Inc. / Futurek Inc.



ジオ・コスモスの一枚膜を越えた向こう側には、いったい何が隠れているのか？球体を覆った表面の薄い「膜」を表現し、その奥にあるものを「想像させる」ことで、ジオ・コスモスに今まで見たことのないような 3　次元感を与えることを目的にした作品。

【審査員コメント】地球を剥いたら何が見える?　気持ちよい映像で暴いてもらえることを期待します　（小久保英一郎）

「ウォッシング」　岡村浩志



洗濯を待つ間、洗濯機の回転をぼーっと眺めてしまうところから着想。地球の各国がばらばらに洗濯され、乾燥するまでの流れを球体ディスプレイの特性を活かして描くアニメーション作品。

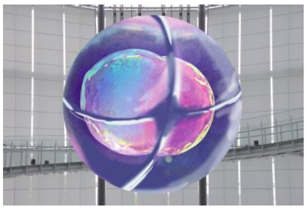
【審査員コメント】ジオ・コスモスの球体の特性をとても生かした企画だと思っています。面白い回転をするのをみてみたいなぁと。（辻川幸一郎）

「if you only knew」　中津川敦

ジオ・コスモスを深海に見立て、光と闇の演出によって、1　匹の魚が希望を見出すまでのストーリーを描く作品。見る角度によって異なる瞬間を同時に描くことに挑戦する。

【審査員コメント】孤独というテーマにぐっときました。絵本をみているような感覚になれたらうれしいです。（辻川幸一郎）

「分裂し集結する世界」　笠原裕美子



細胞分裂から赤ん坊、そして粒子となり星空へ展開していくストーリー。同じ細胞から分裂してなる人類、同じ資源と場所を共有し共存する地球のすべての壮大な「目に見えないつながり」を改めて感じる作品を目指す。

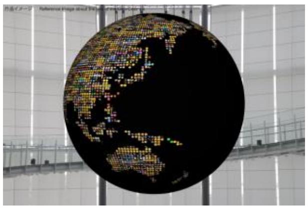
【審査員コメント】このオドロオドロしさと懐かしさとキモ可愛さを具備した怪しい映像が、日本の科学技術の象徴たるジオ・コスモスに表示されるというギャップに面白さを感じます（脇田玲）

■ライブコンテンツ部門　ファイナリスト（入選）(5 作品、順不同)

センサーやライブデータなどを用いる本部門でも、本審査に向け作品を制作します。企画書で提案された内容が、どのように実現されるのでしょうか。新設部門ですが、1 月に開催された技術説明会への出席者も多く、ジオ・コスモスに関する知識も十分、作品の完成度に期待が高まります。

【審査員】小久保　英一郎（天文学者）、辻川　幸一郎（映像作家）、長谷川　踏太（Wieden+Kennedy Tokyo エグゼクティブ・クリエイティブ・ディレクター）、脇田　玲（アーティスト/慶應義塾大学 SFC 教授）　※敬称略、順不同

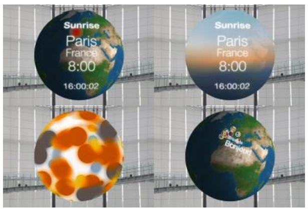
「エモーションズ」　相馬一夫　/　林洋介



リアルタイムに近い頻度で SNS の投稿から抽出した「Emoji」の画像を、投稿に付随する位置情報をもとに、ジオ・コスモス上にマッピングする。デジタルな世界観の中で「人の感情と結びついたなにか」が現れてくることをねらう。

【審査員コメント】万国共通といってもよい絵文字(emoticon)を用いて、誰がみても直感的に世界各地の感情が俯瞰できるところが良かった。実際に完成したときにどんな世界の感情が見えるかがたのしみです。（長谷川踏太）

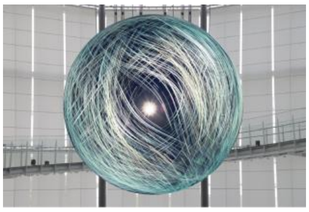
「ひとけい」　アラカワケンスケ



世界各地の日の出・日の入り時間を切り口に、ジオ・コスモスで世界の各都市の天気情報、各都市の多様性を朝日・夕日の色で表現した時計にする作品

【審査員コメント】「おやすみなさい」から「おはよう」への「朝のリレー」のリアルタイム可視化に期待します。多くの言語に対応できるといいと思います。（小久保英一郎）

「inside」　三上英樹　/　河上裕紀



人間の知りたいという欲求、そして探すという行為を表現することがねらい。沢山のオブジェクトに包まれたジオ・コスモスに、鑑賞者がかざした腕を動かすとセンサーによってかきわけることができる。オブジェクトは少しずつ取り払われていくが、完全に中を見る前にオブジェクトがジオ・コスモスを覆ってしまう。

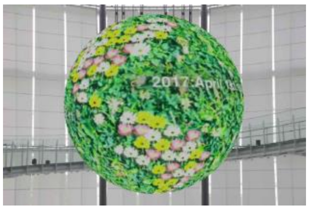
【審査員コメント】単純に子供が楽しんでやっている姿を見てみたいなと思いました。大人もきっと楽しいと思います。（辻川幸一郎）

「くっつく」　三上英樹　/　河上裕紀

来館者を撮影した画像を映像の要素として使用する。画像の人物が 1 人 1 人「磁力」の要素を持っていて、それぞれが徐々にひかれあってやがてくっつきグループになったり、離ればなれになったりする。人と人とのつながりを表現する作品。

【審査員コメント】今この場にいるひとたちのシルエットが出てくるのが面白そうだと思います。いろんな人と、いろんなカップリングをするというのも楽しみにしています。（辻川幸一郎）

「HBD / RIP 」　西村 保彦　/　瀬長 孝久　/　曽根 良介



誕生日に大切な人を祝う「Happy Birth Day」、命日に大切な故人を弔う「Requiescat in Pace」。大切な日に人を想う、という同じ願いが込められている言葉を、インターネット上からリアルタイムで収集し可視化する。誕生日には鮮やかな花を、命日には白い花が表示され、今、世界中で起きている「生と死」を身近に感じる作品。

【審査員コメント】戦場での死者数と死因を可視化したナイチンゲールの仕事がインフォグラフィクスの始まりであるとすると、本作はその延長戦上に位置する作品です。球面ディスプレイならではの新しいデザインを期待します。（脇田玲）

■アイディア部門　ファイナリスト（入選）（6 作品、順不同）
新設のアイディア部門では、ジオ・コスモスとその周辺の展示空間を活かしたイベントやアクティビティを自由に提案します。本審査会は審査員と来館者の前で行う公開プレゼンテーションによって行われ、大賞が決定します。審査員をどのように説得し魅了するのか、プレゼンテーションにすべてがかかっています。

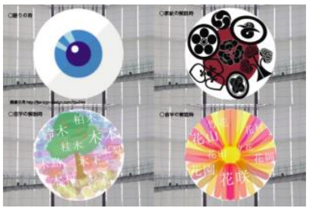
【審査員】上田壮一（一般社団法人 Think the Earth　理事／プロデューサー）、鈴木おさむ（放送作家）、高橋桂子（国立研究開発法人海洋研究開発機構　地球情報基盤センター　センター長）、土佐信道（明和電機　代表取締役社長）、毛利衛（日本科学未来館　館長）　※敬称略、順不同

「Geo-Window　～漆黒の闇に輝く地球～」　久田　旭彦

夜間開館でしか見られなかったジオ・コスモスの本来の輝きを、偏光フィルムなどを使い昼間でも見ることができるシステム「Geo-Window」の提案。

【審査員コメント】ジオ・コスモスを変えるのではなく、周りの環境を変えるという発想がユニーク。太陽が出ていても闇に浮かぶ地球が見られるというのがおもしろい。（毛利衛）

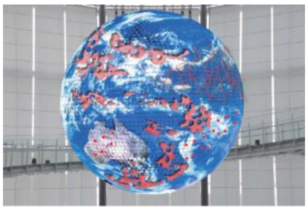
「あなたの由来、何ですか？」　仲村　怜夏



家紋や名字の由来などをジオ・コスモスに投影したり、ジオ・コスモスに語らせたりすることで、会うことのできない先祖や昔生きていた人々に想いを馳せ、自分の由来を考え、命や家族の大切さを感じるアクティビティの提案。

【審査員コメント】(仲村さんは)若くて新しいものが好きな世代のはずなのに、家系図や命のつながりをテーマに選んでいて古風なところが良いと思いました。（毛利衛）

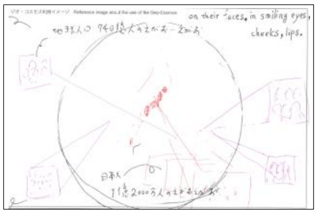
「歌われる気象」　山崎　阿弥



大気の流れを示す雲など、リアルタイムの気象に呼応して、声、笙、チェロの奏者によって歌を紡ぎだし、さらにその音声データをリアルタイムで可視化、ジオ・コスモスの気象映像に重ねて映し出すというパフォーマンスの提案。

【審査員コメント】風が歌の発生のもと、というコンセプトが素敵。常にゆらいでいるグローバルな気象データと、洋の東西を問わない楽器の組み合わせで、ジオ・コスモスの空間で即興的に繰り広げられるビジュアライゼーションに魅力を感じました。（上田壮一）

「写真は人を幸せにする」　矢嶋　博士



「愛」「幸せ」「悲しみ」「希望」を静止画(写真)に定着させる試み。作者が息子を見つめるまなざしなど、極めて個人的な視点から撮影された写真をジオ・コスモスに映しだす。

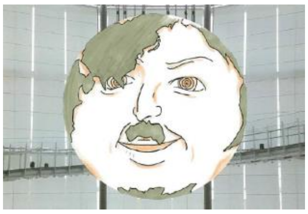
【審査員コメント】普通はもっとグローバルで広いことを考えてしまうと思いますが、写真家ならではの(発想で)、自分が何を見るか、見られているかに絞ったところが、逆にわたくしごとの話だからこそ、ジオ・コスモスで見たら感動するんじゃないかと思いました。（土佐信道）

「テクノロジー演劇公演　The power of imagination」　上嶋　萌

1968 年のアポロ 8 号による有人周回軌道飛行から約 50 年。人類を進化させてきた想像と発見の歴史を、15　人のパフォーマーが表現。鑑賞者はヘッドマウントディスプレイをつけて鑑賞するというテクノロジー演劇の提案。

【審査員コメント】人類が初めて月の地平線に昇る地球を見た 1968 年からおよそ半世紀というタイミングで、未来館でセレブレーションイベントを行うとしたら、メインコンテンツとして話題性があるのではないかと思いました。（上田壮一）

「地球おじさん」　降旗　俊介



地球を中年男性（46　億歳）に見立て対話をすることで、温暖化、貧困、戦争、汚染など、解決すべき多くの問題を身近に考えてもらおうという提案。環境破壊されたところは肌荒れしていたりする。

【審査員コメント】「母なる地球」ならおばさんだろう！なんでおじさんだ！という、ジオ・コスモスという公的な装置をゆるキャラ扱いするギャップが非常に面白い。意外と子供に人気が出るのでは？（土佐信道）